

□海外文献紹介□

小児における Barrett 食道：慢性胃食道逆流ゆえの結果

Barrett's esophagus in children: A consequence of chronic gastro-esophageal reflux. *BB Dahms, FC Rothstein* (Gastroenterology 86: 318-323, 1984)

成人における Barrett 食道が胃食道逆流（以下 GER）に起因する後天性疾患であることは周知のごとくであるが、バレット食道が小児に存在した場合は、小児期にも GER がしばしば認められるという事実にもかかわらず、むしろ先天性の異常とみなされている。著者らは 19 歳以下の患者で、GER が疑われ検査が施行された 103 例のうち 13 例 (13%) に Barrett 食道を認めたと報告し、その成因は先天性でなく GER によると示唆している。

GER の確認は UGI X-P あるいは pH モニターで、組織学的検討は直視下生検あるいは吸引生検（い

れも LES から 2~3 cm 口側で採取）で、臨床像は乳児期からの病歴で詳細に検討している。Barrett 食道と診断された 13 例の年齢分布は生後 8 カ月から 19 歳で、全例に GER 症状あるいは食道炎の症状が認められたが、殊に乳児期に過度の吐き戻しがあった。2 例は吐血で来院し、他の 5 例にも吐血歴があった。来院時 13 例中 9 例は便ヘモカルト陽性であった。9 例は嚥下時痛を、6 例は嚥下困難を訴えた。また胸痛が強く夜間目が覚める、固形物より流動物を好む、固形物によりせき込むとの訴えもあり、4 例は 3 カ月以上続く夜間の咳嗽、3 例に少なくとも 2 回以上の肺炎歴が確認された。

UGI X-P を施行した 9 例中 5 例に、食道狭窄と潰瘍を認めた。裂孔ヘルニアや幽門狭窄は認めなかった。UGI X-P で異常のなかった 4 例を含む 8 例に pH モニターを施行し、全例に GER を確認した。食道

内圧検査で 7 例中 6 例に LES 圧の減弱を認め、2 例の LES は殊に短かった (≤ 0.5 cm)。内視鏡検査では、5 例に食道狭窄 (LES 口側 5~10 cm) を認め、3 例に食道粘膜の高度の発赤と中等度の易出血性を、10 例に滲出物の付着、潰瘍を認めたが、内視鏡的に円柱上皮粘膜の存在を指摘できたのは 5 例にすぎなかった。病理組織学的には、成人と同様 3 型の円柱上皮を認め、11 例は胃噴門腺型、7 例は胃噴門部を思わせる接合部型であった。Barrett 食道の典型である第 3 型は 2 例に認められたにすぎなかったが、この変化に至るまでにはかなりの年月を要するものと考察している。更に、小児の Barrett 食道は成人と異なり、はっきりした内視鏡的所見を呈さず、食道炎の像をとっていることがその認識を困難なものにしていると述べている。

（愛知県がんセンター第 1 内科

伊藤克昭 抄）